

アイヌ民族の歴史や文化を広く紹介

# 第33回アイヌ民族文化祭 ウポポイで開催

親子連れらが興味深く鑑賞



北海道アイヌ協会主催の「第33回アイヌ民族文化祭」が11月7日、開業したばかりのウポポイ（民族共生象徴空間）で開かれ、関係者や施設来場者らが公演や講演を通してアイヌ民族の歴史と文化への理解を深めました。

「松浦武四郎北海道命名150年記念事業」の3年目（最終年）の意味を加えて企画されました。大川勝同協会理事長のあいさつに続き、地元白老町の戸田安彦町長が「150年事業の取り組みの中で、ここウポポイで開催されることは大変喜ばしく、意義あること」と祝辞を述べました。

スライド紙芝居「武四郎物語」の軽妙な語り口で開幕した文化祭は、白老民族芸能保存会、平取アイヌ文化保存会、帯広カムイトウウポポ保存会がユネスコ無形文化遺産にもなっているアイヌ古式舞踊を披露し、訪れた親子連れなどが興味深く鑑賞していました。講演は北海道博物館の三浦泰之学芸主幹、札幌医科大学の大島直行客員教授がそれぞれお話しし、三浦さんは武四郎について「旅こそ我が人生」「最新の情報は彼に聞け」「激しすぎる古物愛、そして、饒舌ぶり」という三つのキーワードで生涯と人物像を紹介しました。



## 国立アイヌ民族博物館と北大が学術連携協定締結

国立アイヌ民族博物館（佐々木史郎館長）と北大は11月13日、共同研究推進などを目的に、学術連携協定を締結しました。同大のアイヌ・先住民研究センター（加藤博文センター長）は、アイヌ・先住民研究の推進と人材育成、博物館はアイヌ民族の歴史と文化の国内外への発信と調査・研究・収集・展示における連携などを狙い、相互の研究者の交流や国際シンポジウムの開催などを通じ協力します。国立民族博物館が外部の研究機関と協定を結ぶのは初めてということです。



ウポポイで行われた調印式で署名した加藤センター長は「大学としても新しいステージ。具体的には博物館の研究員が客員研究員として国際的な共同研究に参加したり、大学の研究者が博物館の文献や資料、分析器を活用するなどということが可能になる。博物館をサテライトキャンパスとして学生の授業や公開講座なども検討している」と話しました。佐々木館長は「研究の分野で、国内外の研究者のネットワークへ参入できるのはわれわれにとってもありがたい。まさに第一歩。アイヌや先住民の研究での国際的な拠点を目指して頑張っていきたい」と感想を話しました。



協定書を手にする佐々木館長（左）と加藤センター長

知っておこう  
アイヌ文化

## カッケンハツタリ

イランカラッテ。チキサニでは、今年も10月22日(木)と11月11日(水)、ウヨロ川で川のイオル「川漁体験」を行いました。10月22日は白老小学校4年生、11月11日は萩野小学校3年生の児童が参加し、アイヌ民族の伝統漁具マレクでサケを捕獲した他、イナウ（木幣）の一種であるイサパキニという棒で感謝の意味を込めて、サケの頭をたたき、解体するまでを体験していただきました。さて、川漁体験の会場から150m程上流に、アイヌ語で「カワガラスの淵」を意味する、カッケンハツタリという場所があります。江戸時代、松浦武四郎が北海道各地のアイヌ語地名を記録した『東西蝦夷山川地理取調図』によれば、「カッケトシハツタリ」と記されていますが、地名の意味は記されていません。しかし、現在でもカッケンハツタリ周辺ではカワガラスの姿を目にすることができます。



最後に、カラスとサケにまつわる話として、『アイヌ民族誌』（アイヌ文化保存対策協議会編）には、「白老、幌別方面では、さけののぼるところに頭の毛の禿げたからすが現われると必ず豊漁があるとて、からすに気をくばった。」と書かれています。

アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301